
IS インフィニットストラトス ～輝く永久。無限の空へ願いを。～

高坂夕弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス ー輝く永久。無限の空へ願いを。ー

【Nコード】

N6299Y

【作者名】

高坂夕弥

【あらすじ】

IS インフィニットストラトス。

女性にしか使えないISが使えるようになってしまった少年。

少年は、これからどういう道をたどるのか、それは、誰にもわからない。

これは、ある意味ぶっこわれています。
ほぼ作者得です。

よかったです読んで下さい。

第一話（前書き）

高坂夕弥といいます。

元々は、バカテスの小説

「バカとテストと超電磁砲」を書いていましたが、
ISの小説も書きたくなって、最初作っていた小説を作り直しました。

文才とかないですが、よかったら読んで、感想を書いて下さるとありがたいです。

ではよろしくお願いします。

第一話

.....ふと
思い出す記憶、.....「また会えるよね。」

.....「多分ね。」

.....「約束だよ、.....忘れないでね！」

.....ある少女と結んだ約束.....

あの時から四年ぐらい経った。

あの子が覚えているか知らないし、あの時はある意味大変だった。
離れてから僕は次に進むために動き出していたから、いつまでも構
うことができなかった。

あえて、もう一度言う。

あの時から、

四年ぐらい経った。

俺は、何でこんな所に居るんだろう？

.....周りを見渡すと、

女、女、女、女.....女だらけ

の場所。

そう、俺は一年前に新しくできた友達の付き添いで、とある研究所
に行った。

友達、彼女は、ISと呼ばれるものの操縦者で、この国、日本代表

候補生だった。

彼女は、最初は口も聞かず一人で居るかのようだったけど、次第に心を開いてくれて少しずつ話出来るようになって、少しずつ仲良くなった。

ある日、彼女は見せたい物があると言って僕を連れていくとそこはIS研究所。

彼女は代表候補生であり、訓練している所を俺に見てもらいたかっただろうから俺を連れて来た。

彼女の訓練も終わり、彼女が待機している所に移動しようとする、研究者らしき人にぶつかった。

ぶつかったことは、たいしたことは無かったけど、問題はその後だ。

ぶつかった勢いで、近くにあったメンテナンス中のIS「打鉄」に触れてしまった。

すると、そのISは突然光りだして、俺の頭の中にたくさんの信号が送られてくる。そして、気づくと男が使えないはずのISに俺は乗っていた。

それがすべてのはじまりでそこからは、俺の意思などからつきり無視でどんな話がすすんでいき、俺は国の役人達によって、女だらけの学校『IS学園』に入学させられてしまった。

そして現在、

絶賛アウェー状態です。

隣の席には、青髪で眼鏡をかけている俺の友達がいるけど、その他

はアウエー！

「おはようございます！私がこの1ー4の担任の唐石悠希です。」
担任の挨拶が始まって、今だ全員の視線が俺に集まり、アウエー。
正直つらい。

「…だ、大丈夫？」

心配してくれる優しい友達。
更識簪。

簪が優しく声をかけてくれたから、空元気をみせて
「大丈夫！」と答えてみせた。

担任、副担任の紹介が終わり、自己紹介に移っていった。
担任の意向で、自己紹介の順番は、くじで決まったんだが、狙って
いたかのように俺は一番最後になってしまった。

自己紹介が進み、最後……………俺の番。
周りからの視線が痛い、最初はきちんと決めたいから頑張つてや
る。

「俺は、王賀優。なんだかんだでISに乗れる男です。とりあえず
一年間よろしく願います。」

ふう、一応やり切れた。

歓声とか聞こえたけど、気にしないで、とりあえず頑張っていこう。

「が、頑張っで、いこう。優。」

簪もいるし、何とか乗り切れると思う。

……………多分。

第二話（前書き）

高坂夕弥です。

第二話です。

今、完全に勢いで書いています。

定期更新にしたいけどそれは後ほど。

空牙刹那さん、感想ありがとうございます。

ぜひ、また感想を書いてくれると嬉しいです。

そしてほかの皆さん。

どうかこの作品に感想を下さい！

とりあえず、ではどうぞ。

第二話

俺は王賀優。

なんだかんだで、ここ、IS学園に入れられてしまった。

IS学園は、元々女子校だ。つまり、男子が俺一人となる。ということ、今、教室内外から俺の事を見にたくさん生徒がいる。

「へえ、噂の男子。ちょっとカッコイイかも。」

「なんかさ、黒髪で、なんかクールっていう感じがさ。」

「アタシ、話かけてこようかな？」

「なに、あんた。抜け駆けするの？」

女子達が牽制しあつて、ピリピリとしていて何か嫌。

まあ、初日はそんなものだろうと諦める俺、立派。

まあ、わかったか、わからないかよくわからない授業を受け、ようやく昼休みになった。

「簪、飯食いに行こう。」

「、うん、い、いいよ。」

「何、あの子王賀君の知り合い？」

「名前で呼ばれているし、何かうらやましいー！」

まあ、周りの声は置いといて、簪と一緒に教室を出て食堂に行こうとする。

誰か体ごと手をひっぱられました。

簪と離れちゃいけないと思って簪の手をぎゅっと握り「／／／……手。…ちよっと／／。優君」

気にしない、そうして一緒につれてくれました。

まあ、着いたのは、食堂なんだけど、

俺達を連れて来た奴は、俺の知り合い、まあ友達だった。

「久しぶり、優。」

「い、一夏？一夏なのか？」

「うん、そうだよ。」

「／／、………優君。誰？」

「あゝ、違う人までつれてきちゃった。まあいいか。」

いいのかよ！とツツコミたくなる俺だったが、ちよっと我慢。

「こいつが織斑一夏。」

俺の幼なじみだ。」

「そして、更識簪。」

俺が転校した先で友達になった。」

「……………（友達は嫌、出来れば、こゝ、恋人がいいかも）よ、よろしく。」

「よろしく！簪さん。」

ちなみに二人の心の会話は、

「き、君誰？優君の何なの？優君は私のものだから、取らないで。」
（簪）

「そっちこそ何？」

私は、優とあなたより早く会っていて、長い時間過ごしているんだから！」

（一夏）

「……、だ、だけど優が好きな気持ちはあ、あなたには負けない。」

（簪）

「こっちのセリフだよ！」（一夏）

まあ、優には、この会話は伝わっていない。

とりあえず、食堂に来たから飯でも食おうていうことになって、それぞれ食券を買いに行った。

一夏は日帰り定食の焼き魚定食。

簪は、かき揚げうどん。

ちなみに俺は、冷奴定食。だって豆が好きなんだもん。

まあ、三人で、食べながら話をしていると話に割り込んで来る人がいた。

「あゝ！ ゆーきゅんだゝ。かんちゃんもいるし、おりむゝもいるゝ。」

特徴的な話し方をする人、多分……………、

「…、ほ、本音、どうしたの。」

やっぱりあいつか。

「あの子誰？優の知り合い？」「あいつは、布仏本音。」

簪の……、まあ幼なじみみたいなものだろう。一夏の事を知っているということは、同じクラスなんだろ」

「き、気づいて無かった。（本当は、優と同じクラスじゃなくて残念でその場合じゃなかったから、……………あと千冬姉痛い。）

」

まあ、話していると、

「優、携帯持っているでしょ？」

「持っているけど。」

「貸して、アドレス交換しよ！」

「……私も、…実は優君のアドレス知らない。」

「はい、わたしもゆーきゅんのアドレスしりたーい。」

「わかった、わかったからじゃあ、俺から送るわ。」

……………赤外線受信中……

「よし！優の登録完了！」「…、私も、終わった。」「わたしも。」

」

まあ、ついでに言っておくと周りで話を聞いていた女子達に迫られて、俺の持っているアドレスはめちゃくちゃ増えた。

時が過ぎて放課後。

俺は今家にいる。

なぜか千冬さんと共に。

簡単に訳を説明すると、元々自宅通学だった俺を無理矢理寮に入れることになってそのための生活用品を取りに来たということになる。俺は衣装持ちじゃないし、服はそこまでいらない。

俺の荷物の半分以上は、

アニメ、アニメ、アニメグッズだ。

深夜アニメをよく見ていた俺は、小遣いでよくアニメグッズを買っていた。

「王賀。お前が何に興味があるかは関係ないが、深夜まで起きていたら、……………分かってるよな？」

「は、はい。ちゃんと録画して見ます。」

「よろしい。」

はあく、やっぱりこええ。アニメはリアルタイムで見るのがいいんだけどな。

まあ、仕方ない。諦めるしかない。

荷物を持って学園に着いたのは、夜の8時半。

飯は、千冬さんにラーメンおごってもらったからいいけど。

俺の部屋は、三人部屋。

つまり女子と同室ということになる。

心を決めた俺は、部屋のドアを開けると

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6299y/>

IS インフィニットストラトス ~輝く永久。無限の空へ願いを。~

2011年11月20日16時09分発行